

クスコ郊外のサクサイワマン遺跡にて行われる「インティ・ライミ」のメインイベント。

歴史を重ねた 二つの祭り





太陽の祭「インティ・ライミ」では
メインイベントの1か月ほど前から毎週のようにパレードが行われる。



民族楽器サンポーニャを吹きながら
太鼓を打ち鳴らす楽団。



地元住民が最も盛り上がる「インティ・ライミ」の後夜祭。
楽団と踊り手が夜の街を練り歩く。



多くの観光客が訪れる祭りのシーズンに向け、
地元では土産物の生産に力が入っていた。



リヤマの剥製を担ぎながら踊る青年。



「コイヨリッティ」からの帰り道。
一般の参加者たちの様子。



伝統食チリウチュとして
祭りで振る舞われる、
モルモットの仲間である
クイの丸焼き。



「コイヨリッティ」のために集まった、
アマゾン地方の衣装を着た踊り手たち。



クスコの街の路地裏では
伝統工芸品を売る女性が多く見られた。



深夜3時頃、おそらく打ち上げに失敗したのだろう。テントのそばで炸裂した火花の音で目覚める。体は芯から冷え切っており、このまま眠っていた方が火花が当たるよりも危険だったかもしれない。氷点下10度は下回っているはずだ。

かつてインカ帝国の首都として栄えたペルーのクスコから4時間ほどバスに乗り、さらにそこから4時間ほど歩いた山の中。標高はおよそ4500メートルと富士山よりもはるかに高く、雪混じりの風が肌を刺すように冷たい。この過酷な環境で三日三晩踊り続けるという奇祭が「コイヨリッティ」だ。コイヨは現地言葉で星を、リッティは雪を表す。星は貧しさが豊かさに変わることを象徴している。数万人規模の参加者が集まる大きな祭りだが、外国人観光客は数十人ほど。アandesの山岳地帯に慣れた地元民、または登山家でもなければ、とてもじゃないが体が持たない。この日の夕暮れときには「氷河の頂上に登り、巨大な十字架を立てる」というさらに過酷なメインイベントが控えていた。

「これは俺たちの祭りだ。文句があるのか？」とウククがムチを振り下ろす。ウククとはクマを模した伝統衣装を着る覆面の踊り手。祭りを仕切る警察のような存在でもある。ムチで打たれているのは隣国エクスアドルで知り合った友人ホセ。マナー違反をしたようだ。ムチで打たれば罪は許

される。少し痛そうだがホセは笑顔だ。いっぽう私は寒さの限界だった。ウククと意気投合し「一緒に氷河に登る」と言いはじめたホセを残し、私は下山を決心した。

古都クスコへ戻れば、こちらも祭りムード一色。冬至に開催される太陽の祭「インティ・ライミ」に先駆け、1か月ほど前から毎週のようにパレードが行われていた。鉱業、漁業に次いで観光業が国の収入の柱であるペルー。なかでもクスコは、ペルーを訪れた外国人観光客の8割が足を運ぶという人気スポットである。祭りのシーズンは観光業を営む人たちのかき入れときだ。安定した経済成長を続けるペルーだが、山岳地域の村人の暮らしはまだまだ豊かとは言えない。路地裏には、手作りの衣料品や雑貨を売るため遠くの村からやって来るお婆ちゃんの姿がちらほら。手編みで仕上げられるには何日もかかりそうなベルトが、機械織りの土産物ときほど変わらない価格だったので購入することにした。私の要望に合わせて、お婆ちゃんはベルトをカメラのストラップに使えるよう編み直してくれた。いよいよ迎えた「インティ・ライミ」の当日。メインイベントは、クスコ郊外にあるインカ時代の宗教施設だというサクサイワマン遺跡にて行われる。地元住民ばかりの「コイヨリッティ」とは異なり、間近で見物しているのは国外からの観光客が中心。よい席は見物料が高いそう。私は地元住民と一緒に遠く離れた崖の上から眺めるこ

とにした。

インカ帝国は四つの地域からなる連邦国家だった。祭りでは各地の代表者が皇帝のもとに集い、歌や踊りを披露する。かつての宗教儀式を再現しているものの野外ミュージカルのような雰囲気だ。「ほとんど見えやしない」と怒る周りの観客を尻目に、望遠レンズをつけたカメラをのぞき込む。かわいらしい装飾品をつけた子どもたちのリヤマが中央の舞台に上げられた。生贄である。インカ皇帝に扮した男が大きなナイフを突き刺した——ように見えたが、取り出された心臓と肺は模造品。かつては本当に生贄を捧げていたという。

日が沈んでからは後夜祭が行われた。楽団を引き連れた踊り手のチームがクスコの街中を行き交う。1か月以上は続いていた祭りムードも今日でおしまい。クスコで暮らす人々にとって、これが祭りの本当のグランドフィナーレである。ファイナードをのぞいていると、踊り手たちの輪の中に交ざり込んでいる笑顔のホセを見つけた。「祭りは見物ではない。ともに楽しむものだろう」と彼は言う。私も撮影を中断し、一緒に踊るのだった。

佐藤 潮(さとう うしほ)

1983年生まれ。中国留学中、チベット高原の過酷な環境でも生き生きと暮らす人々に魅せられ、以後は世界各地の山岳地帯に足を運んでいる。23歳からは編集者・ライターとして旅行やグルメを中心にさまざまな媒体を制作。30代からはカメラマンとしての仕事も増えてきた。共著に『夢がかなう世界の旅(びあ)』。



左：街中のいたるところで色鮮やかな伝統模様の雑貨が売られていた。中：古都クスコの中心地であるアルマス広場。右：街中に掲げられた虹色の旗。インカ帝国成立以前から1,000年以上続く伝統的デザインである。

「コイヨリッティ」では、ウクク(クマ)と呼ばれる踊り手兼警備員たちが観光客の挙動も含めて監視している。